

## 名古屋市の淡水産貝類 (補遺)

川瀬 基弘

愛知みずほ大学人間科学部 〒467-0867 愛知県名古屋市瑞穂区春敲町2-13

### Freshwater mollusks in Nagoya city, Aichi Prefecture, Japan (Supplement)

Motohiro KAWASE

Department of Human Science, Aichi Mizuho College, 2-13 Shunko-cho, Mizuho-ku, Nagoya, Aichi 467-0867, Japan.

Correspondence:

Motohiro KAWASE E-mail: kawase@mizuho-c.ac.jp

#### 要旨

文献調査の結果、新たに2種の淡水産貝類が名古屋市内に棲息していたことが分かった。これにより名古屋市に棲息している (または棲息していた) 淡水産貝類は36種となった。

#### 名古屋市の淡水産貝類

本誌第5巻において名古屋市に棲息している淡水産貝類および絶滅した淡水産貝類34種が報告された (川瀬ほか, 2018)。その後の文献調査により、新たに2種の淡水産貝類が名古屋市内に棲息していたことが明らかになったので、これらの記録が見られる文献資料とともに追加報告する。

#### インドヒラマキガイ

##### *Indoplanorbis exustus* (Deshayes, 1832)

倉内ほか (1985) は移入種として名古屋市での記録を残しているが、詳細な地名については記述していない。また、中日新聞 (朝刊) 名古屋とその周辺のサカナ (121) インドヒラマキガイ (1988年1月22日) においても本種についての記事が掲載されている。

本種の原産地は東南アジアからインドあたりと考えられるが、熱帯地方の各地に移入されて自然繁殖しており、国内では関西以西の温泉地等の排水路などに定着している (増田・内山, 2004)。また、紀平ほか (2003) によれば、インドヒラマキガイはレッドスネールやレッドラムズホーンとも呼ばれ、本種自体を観賞用としたり、緑藻で汚れる熱帯魚飼育水槽ガラス壁の掃除用に移入され

た。昭和30年代頃から本種の販売が全国的に広がり、放棄されたと考えられる個体や、繁殖池から逃避したものが自然水域に見られるようになった。当初は冬期に死滅していたが、その後は超冬の報告が聞かれるようになった (紀平ほか, 2003)。

著者が実施した2008～2018年の名古屋市内の淡水産貝類調査では、インドヒラマキガイの生貝・死殻ともに確認していない。しかし、名古屋市内を含む県内各地の熱帯魚販売店など淡水生物を取り扱う販売店では、多くの店舗で本種の取り扱いが現在でも行われており、これらが今後市内の自然水域に拡散する危険性は十分に考えられる。また、取り扱い店舗で飼育されているインドヒラマキガイは、似て非なる別種の可能性もあり、近縁の外来種が飼育・販売用に複数種輸入されている可能性がある。

#### カラスガイ

##### *Cristaria plicata* (Leach, 1815)

田中 (1964) における市内での本種の記録はないが、田中 (1981) は1969年頃に昭和区鶴舞公園竜ヶ池でカラスガイが発見されたことを述べている。これによれば、護岸工事のために水が抜かれた竜ヶ池の水底で乾燥に耐

えようとするカラスガイが見つかったと記されている。あわせて翼状突起の痕跡が残るカラスガイの標本写真が掲載されているが、田中 (1981) では一般向けの読み物として琵琶湖のカラスガイなども話題に登場するため、図示されたものが竜ヶ池産の個体か否かは不明である。また、中日新聞 (朝刊) 名古屋とその周辺のサカナ (106) カラスガイ (1988年1月5日) においても本種についての記事が掲載されており、20年ほど前に鶴舞公園竜ヶ池の工事の時、干上がった池の泥底からカラスガイが多数見つかったと記されている。

愛知県環境調査センター (2009) によれば、カラスガイの愛知県からの正式な棲息記録はないとされているが、倉内ほか (1985) は偶因分布として佐屋での記録を残している。愛知県三河地域の淡水貝類相の詳細な調査

(木村, 1994) でも県内からカラスガイは発見されておらず、もともと東海地域には分布していなかった可能性が指摘されている。これらの文献情報および竜ヶ池が公園内の溜池であることなどから、昭和区鶴舞公園竜ヶ池のカラスガイは自然分布の個体群ではない可能性が高い。また、竜ヶ池の最近の調査 (川瀬ほか, 2018) ではカラスガイの棲息は確認されておらず既に絶滅した可能性が高いと考えられる。

### 名古屋市から記録のある淡水産貝類のカテゴリー

川瀬ほか (2018), 川瀬 (2018) および追加調査をもとに、名古屋市から記録のある淡水産貝類のカテゴリー (表1) を作成した。

表1. 名古屋市から記録のある淡水産貝類のカテゴリー

1	マルタニシ	絶滅危惧 I A 類
2	オオタニシ	絶滅危惧 II 類
3	ヒメタニシ	指定外 (市内全域に分布, 多産)
4	スクミリンゴガイ	南アメリカ原産の外来種
5	マメタニシ	絶滅危惧 I A 類 (絶滅した可能性が高い)
6	ヌノメカワニナ	国内? 移入種 (移入経路は不明)
7	カワニナ	市内の分布は移入個体群の可能性あり
8	チリメンカワニナ	市内の分布は移入個体群の可能性あり
9	ヒメモノアラガイ	指定外 (市内全域に分布, 多産)
10	コシダカヒメモノアラガイ	在来種か外来種か要検討
11	ハブタエモノアラガイ	南アメリカ原産の外来種
12	モノアラガイ	絶滅危惧 I B 類 (絶滅に要変更)
13	モノアラガイ属の一種 A	外来種 (原産地不明)
14	モノアラガイ属の一種 B	本誌 (熊澤ほか, 2019) 参照
15	サカマキガイ	ヨーロッパ原産の外来種
16	ヒラマキミズマイマイ	準絶滅危惧
17	ヒメヒラマキミズマイマイ	指定外 (絶滅危惧 I B 類に指定すべき)
18	ヒラマキガイモドキ	準絶滅危惧 (絶滅危惧 II 類に要変更)
19	クルマヒラマキガイ	国内移入種 (移入経路は不明)
20	ヒロマキミズマイマイ	北アメリカ原産の外来種
21	カワネジガイ	絶滅
22	インドヒラマキガイ	東南アジア・インド原産の外来種
23	カワコザラガイ	在来種か外来種か要検討
24	イシガイ	絶滅危惧 I A 類 (絶滅した可能性が高い)
25	オバエボシガイ	絶滅 (レッドデータブック 2015 に未掲載)
26	マツカサガイ	絶滅 (レッドデータブック 2015 に未掲載)
27	トンガリササノハガイ	絶滅 (レッドデータブック 2015 に未掲載)
28	カタハガイ	絶滅 (レッドデータブック 2015 に未掲載)
29	カラスガイ	国内移入種? (絶滅した可能性大)
30	タガイ	絶滅危惧 I A 類
31	ヌマガイ	絶滅危惧 I B 類
32	マシジミ	絶滅危惧 I A 類 (近世期の外来種である可能性大)
33	タイワンシジミ	中国・朝鮮半島原産の外来種
34	タイリクシジミ	外来種 (自然には定着していない可能性大)
35	ウエジマメシジミ	絶滅危惧 I B 類
36	ドブシジミ	指定外 (絶滅危惧 II 類に指定すべき)

## 謝辞

この報告をまとめるにあたり、名古屋市動植物実態調査に係る専門家会合の委員である天野 勲氏には文献資料をご提供いただいた。この場をお借りしてお礼申し上げます。

## 引用文献

愛知県環境調査センター. 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち2009—動物編一. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋. 651 pp.

川瀬基弘. 2018. なごや生きもの一斉調査・2017～なごやで探そう! 水の中の妖精～淡水貝編 報告書. なごや生物多様性保全活動協議会, 名古屋. 40 pp.

川瀬基弘・市原 俊・寺本匡寛・鶴飼 普. 2018. 名古屋市の淡水産貝類. なごやの生物多様性, 5: 33-45.

紀平 肇・松田征也・内山りゅう. 2003. 日本産淡水貝類図鑑①琵琶湖・淀川産の淡水貝類. ピーシーズ, 東京. 159 pp.

木村昭一. 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報 (全国高等学校水産教育研究会), 33: 14-34.

倉内一二・佐藤徳次・原田猪津夫・安藤 尚・原田一夫・池田芳雄. 1985. 愛知県の自然環境1984. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋. 244 pp.

増田 修・内山りゅう. 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京. 240 pp.

田中守彦. 1964. 名古屋市産淡水貝類の研究 (謄写版). 20 pp.

田中守彦. 1981. 名古屋市内の川や池に見られる貝. 「愛知の理科ものがたり」刊行会 (編). 愛知の理科ものがたり, pp. 68-73. 日本標準, 東京.

